



医療の現場アラカルト - Vol.14

英語担当 スミスさん

通訳センターでは、ビデオ通訳と電話通訳による遠隔通訳を行っています。ヘッドセットから聞こえてくる患者様と医療者の方の声に集中する業務ですが、ビデオ通訳ではそこに視覚情報が加わります。声のトーンや間の取り方、表情の変化にも意識を向けています。画面越しだからこそ、言葉以外の小さなサインを逃さないことが医療通訳にとって大切だと感じています。そのため、通訳が始まると、まるで自分も診察室にいるかのように感じるほどグッと集中しています。通訳が終わった瞬間、緊張がほぐれると同時に、ふっと通訳センターに舞い戻るような感覚があります。

私は大阪の通訳センターに勤務していますが、通訳を通して、これまで訪れたことのない地域の医療現場に関わらせていただいています。

院外薬局の案内を通訳する場面などでは、実際には知らない場所の道案内を通訳させていただくことがあります。通訳終了後に地図でその場所を確認し、「本当に正面にコンビニがある！」と、自分の頭の中で描いていた地図と一致したことがありました。通訳は言葉のやり取りですが、実は頭の中では、想像以上にビジュアル化して処理しているのだと気づいた瞬間でした。



私は思考をビジュアル化しないタイプだと思っていましたので、普段話をしていて時と通訳をしている時とでは、情報処理の方法が違っている可能性があるという点に、面白さを感じました。

また、冬の時期には、医療スタッフの方がタブレットのカメラを窓の外に向け雪景色を見せてくださったこともありました。大阪では雪は舞う程度で積もることはほとんどありません。画面越しに見る雪景色はとても美しく、心を動かされながら通訳を始めることができました。画面の向こうに広がる人とのやり取りに心を寄せながら、今日も通訳センターで一つひとつの言葉に向き合っています。



風邪のひき始めに見る、 国と家庭のケアのかたち

風邪のひき始めや発熱時の対処法は、国や地域、そして家庭ごとにさまざまです。日本では地域医療連携が整っており、まず近所のクリニックを受診することが一般的ですが、一方で「何とか自宅で治そう」とする知恵も代々受け継がれてきました。かりんや蜂蜜、黒豆の煮汁で喉を潤し、大根汁や生姜で体を温める、鼻づまりの時は詰まっている側を上にして寝るなど、どこか懐かしい方法を思い出す方も多いでしょう。

中国では「体を冷やさない」「早めに整える」ことが重視され、白湯や生姜入りのスープ、お粥などをとり、冷たい飲食物は避けます。厚着をして汗をかくことで回復を促すという考え方も特徴的です。蒸気を吸い込む方法や、ハッカ油を使う対処も広く知られています。

アルゼンチンではユーカリが入った蒸気を吸入したり、紅茶にレモン・蜂蜜・生姜を加える習慣や、寝る前に少量のリキュールを飲む家庭もあるそうです。

医学的根拠の有無はさておき、そこには「早く良くなってほしい」という思いが込められています。風邪のケアは、身体だけでなく心を温める文化でもあるのかもしれません。

今月のトピックス



赤ちゃんの性別

ジェンダーリビールに見る「性別」をめぐる文化の違い

近年、欧米を中心に「ジェンダーリビール」が流行し、SNSで関連動画を目にする機会も増えました。ジェンダーリビールとは、赤ちゃんの性別を家族や友人にサプライズで伝えるパーティーのことです。ケーキやバルーン、時には花火などを使い、性別が明らかになる瞬間をみんなで祝います。両親自身も当日まで性別を知らず、医師から紙に書いて封をした状態で受け取り、友人が準備を進めるケースもあるそうです。

つい先日、テレビで出産前にジェンダーリビールを行った様子が紹介されていました。友人から「Tシャツの色で性別を知らせる演出」があり、喜びと涙があふれる場面に、思わず胸を打たれました。

日本でも、パーティーの準備をするために「出来るだけ早く性別を知りたい」と希望する妊婦さんがいるようです。男性児が生まれることが強く望まれる傾向のある国や地域では、事情が大きく異なり、医学的必要性のない胎児性別判定や性別選択を目的とした中絶は法律で厳しく規制されていると聞きます。性別を事前に知ること自体が、慎重に扱われる問題なのです。

一方ペルーでは、お腹の上で指輪を揺らして性別を占うという言い伝えもあります。科学的根拠はなくても、赤ちゃんを思う気持ちは世界共通なのかもしれません。

